発展途上国の環境や開発問題の原因や解決方法についての議論において，「解決」にばかり焦点が置かれることで，「問題の設定自体が間違っている可能性」が見過ごされてしまうことはよく起きる問題のひとつである．間違った問題にまともに答えようとするのは，正しい問題を誤って解くのと同じくらい，もしくはそれ以上の深刻な誤りを引き起こす［佐藤 2002］．本書で扱われたカンボジアの寡婦・メマーイは，彼女たちが貧困で脆弱な存在であることを前提とした枠組みのなかで認知されてきた存在である．そこに一石を投じたのが本研究であり，メマーイの生存戦略をみていくことで，カンボジアの農村がもつ柔軟さ，家族のありようの柔軟さがセーフティネットになっていることを明らかにした．このような社会・家族のルースさが 2000 年代以降もなお機能し続けてきたことが明らかにされたことは，より豊かな生き方を目指す民際学研究にとっても，また現代カンボジアの社会構造を考察していくうえでも興味深く意義深い指摘であろう．

評者が学生時代に初めて東南アジアを旅したとき，無意識に「貧困」を探している自分に気づき，はっとさせられたことがある．「スラム街」といわれ案内されたその場所が，自分が想像したほど「貧しい」場所にみえずに，何か空振りしたような気持ちになった．「問題を解決したい」という動機の存在そのものは非難されるべきものではないが，その視点だけにたって状況をみると，現実の「正しい把握」から遠ざかっていく．地域研究としては当然のことかもしれないが，多少なりとも開発問題に関心のある立場から現地に入り込む機会を得る途上国を研究対象とする研究者にとっては，ときとして忘れがちな点である．そもそもの動機に自覚的であることは，重要な一歩であり，そのことを再確認させてくれる一冊でもある．

引 用 文 献

佐藤　仁．2002．「『問題』を切り取る視点―環境問題とフレーミングの政治学」石弘之編『環境学の技法』東京大学出版会，41-75．

〈太田至総編集　アフリカ潜在力 1〉
松田素二・平野（野元）美佐編．『紛争をおさめる文化―不完全性とブリコラージュの実践』京都大学学術出版会，2016 年，406 p．

田中正隆 *

本書は 2011 年から 2015 年まで実施された科研共同研究「アフリカ潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」の研究成果として刊行された 5 巻のシリーズの巻頭をなす一冊である．他の巻の各論へとつながる導入編としても，地域や分野などで多岐にわたる共同研究の到達点としても読める緻密な構成の論集となっている．つまり，中心概念である「アフリカ潜在力」について本書冒頭の 2 章と末尾の終章において入念に説明され，各論稿においてもこの概念からのアフリカ理解への寄与が意識されて

* 大谷大学文学部

いる．個々の論稿の内容を，まずは以下でおってみたい．

シリーズ全体の序論「『アフリカ潜在力』の探究―紛争解決と共生の実現にむけて」で太田至は，科研プロジェクトの主旨と論集シリーズ全体の概要を説明する．紛争解決や平和構築に関する従来の研究は，欧米出自のリベラルデモクラシーを理念とし，どの地域でも同様な対処法を適用してきた．ややもするとアフリカを欠如態とみなすこうした立場に対して，アフリカに在来の紛争解決や共生の方法に焦点をあてる．だが同時に，西欧近代起源のものを全否定するのでなく，アフリカ社会はそれと交渉してきた歴史を有し，常に変化し続けているという事実も付言される．

序章の松田素二「『アフリカ潜在力』の社会・文化的特質」論文で問題のキーワードが説明される．本研究は，長いあいだ西欧基準によって歪められてきたアフリカ社会が生み出した紛争と共生のための智慧と制度を「アフリカ潜在力」として評価し，その可能性を見出し，21 世紀の人類の共通財産として活用する基盤をつくることを目標とする．したがって，過去，現在，未来にひらかれたアフリカ人の実践，知恵，創意工夫，思想，価値観がこの概念の意味である．とくに本書では，紛争を解決して社会的和解を図り，社会・文化的営みによって共生してゆく力を焦点化している．さらにこの視角の意義を現地で 5 回にわたって開催した討論会（アフリカ・フォーラム）において問い，現地研究者や実践家たちの意見交換のなかで大きな展開をしてきたと説明されている．

第 1 章松本尚之「グローバル化のなかの伝統的権威者―ナイジェリア・イボ社会における国際移民と首長位」論文によると，イボ社会にはもともとは集権的権威はなかったのだが，近代にいたってエゼという伝統的統治者が各地でつくられ，それらがコミュニティの発展に寄与したものに首長位の称号を授与する習慣ができたという．この称号を欲しがるものは国内だけでなく移民社会にも多く，故郷とのつながりが経済的支援をともなうことで，今や世界大にネットワークが広がっている．首長の称号と威信は移民社会において故郷とは異なる価値が付加され，より現代的でグローバルなコンテクストにあった意味をもつようになっているのである．こうした創造性もアフリカ潜在力と読み取れよう．

第 2 章平野（野元）美佐とアンジュ・レンジャ＝ンニェムズエ「現代に開かれた伝統という潜在力―カメルーン・バミレケ首長制社会の紛争処理と伝統的権威」論文によれば，バミレケでは地区集会や地区裁判，首長らによる宮廷裁判をへて国家機関による裁判という複数の審議階梯があるが，地区長や首長が伝統的共同体の自治としてその裁定を行なっている．だが，時代の変化によって往時のような力はない伝統的権威者は，役人や都市居住エリートなどとも関係をむすびながら紛争処理にあたるなどの現代的かつ創造的な対応をみせているという．

第 3 章石田慎一郎「ケニア中央高地イゲンベ地方の紛争処理における平等主義と非人格性」論文では，イゲンベ社会における伝統的な紛争処理について論ずる．イシアロとい

う社会関係にあるクランのもの同士は互いに誠実でなければならず，反すれば災いがもたらされる．もめごとの当事者が宣誓（ムーマ）をすることで，虚偽や過ちを犯したものに災いが下る，いわば自分に対する呪詛となり，真実はやがて明らかとなる．イシアロやムーマによって当事者間の対話では紛糾する事柄を保留し，結論を先送りにして関係を保たせるのだという．

第 4 章太田至「アフリカのローカルな会合における『語る力』『聞く力』『交渉する力』―コンゴのパラヴァー，ボラナのクラン集会，トゥルカナの婚資交渉」論文では，題名の 3 つの事例から交渉する力の共通点を導いている．これらの交渉の場は，一方の責務を係争者に科したり，罪の所在を明確化するような，いわゆる西欧的な目的とは異なるという．つまり，互いが接点をもたない相手＝他者との「交渉」とは真剣勝負であるがゆえに，対立や葛藤が生ずるのは当然であり，だからこそ，「語る力」と「聞く力」およびそれを駆使した「交渉する力」が重視されるというのだ．語り，聞く力を駆使した交渉の場は，むしろ他者を個人として承認する開放的姿勢であり，共生するかたちを粘り強く求める可能性を太田はアフリカ潜在力として見出している．

第 5 章ジョン・ホルツマン「悪い友人と良い敵―サンブル・ポコット・トゥルカナの三者関係における平和と暴力の構築」論文では，ケニア北部のサンブル社会からみたトゥルカナとポコットという隣接する牧畜民間の社会関係を相互の認識から探る．そこではお互いが友か敵かという単純な二分法では収まらない．サンブルとポコットはともに相手民族を殺したものには呪詛が発動するために友人関係にあったが，神秘的な力によって強いられた関係であり，サンブルはポコットを嫌悪し，婚姻もしない．他方，サンブルとトゥルカナは互いを襲撃したり略奪を繰り返す敵同士であるが，サンブルにとってトゥルカナは話がわかる人々とも捉えられている．逆説的だが，紛争は相手のわかる者同士のコミュニケーションであり，敵は紛争後にさまざまな交渉をする相手に変わるのだ．こうした隣人，友人，敵についてのイメージや関係構築は，共生をめぐる考察に示唆的であろう．

第 6 章木村大治「『濃淡の論理』と『線引きの論理』―コンゴ民主共和国ワンバ地域における森の所有をめぐって」論文におけるボンガンド社会では，自然資源を保護するのに，従来その資源が存在している区域を「線引き」し，外部から遮断して保全する方法が合理的解決策とされてきた．しかし，ボンガンドは移住や土地所有の歴史から明確な境界線のない飛び地や川の流域などの緩やかな「濃淡の論理」による土地把握をしている．そして，臨機応変で漸進的な「濃淡」による把握のほうが，むしろ暮らしをめぐる交渉では有益かつ合理的だと論じられる．

第 7 章松田素二「紛争予防のための潜在力―現代ケニアのコミュニティ・ポリシングの事例から」論文では，2007 年末から 2008 年初頭にかけてのケニア全土に広がった選挙後暴力（Post Election Violence: PEV）をとりあげて，暴力を回避する民衆主体の治安維持

活動をアフリカ潜在力の事例として検討する．ケニア政府は今世紀初頭から欧米型のコミュニティ・ポリシングを導入しようとしてきたが，PEV によってより地域の事情に即したそれに転換を余儀なくされた．だが，国家主体のこうした活動よりも，たとえばナイロビのカンゲミ地区で一時的，自生的に発生した自警組織の例を松田は評価する．隣接地区で戦火が広がるなか，この地区では異なる民族の長老が話し合い，青壮年層が民族の壁を越えて無償の合同パトロールをして秩序を保った．これは，多種多様な原理や思想をつなぎあわせるアフリカ潜在力の事例として捉えられよう．

第 8 章金子守恵と重田眞義「共存の作法としての在来知―エチオピア西南部に暮らす農耕民アリと『他者』との出会い」論文によれば，アリ人は 19 世紀後半以来さまざまな外来者による圧迫とともに新たな知識や制度を受け入れてきた．北部からの流入者をガマと呼ぶが，彼らとアリは支配－被支配の関係をもってきた．筆者らはある親子のライフヒストリーをとりあげて分析するなかで，アリが支配側の言語や文化を「知る」ことによってその関係性を再編成したと論ずる．階層的な関係や抑圧的な体制があっても，「知る」ことが他者との関係を見出す方法となっている点を筆者らは強調する．

第 9 章フランシス・ニャムンジョ「フロンティアとしてのアフリカ，異種結節装置としてのコンヴィヴィアリティ―不完全性の社会理論に向けて」論文では，ナイジェリアの作家チュッツオラの小説「やし酒飲み」を起点として西欧的近代と対比されるアフリカの特性，潜在力を論じている．この小説に如実に表現されたアフリカ的想像力では，あらゆるものの境界は意味をもたず，すべてがつねに変わり続ける．つねに変化し続ける世界では，個人も集団もともに不完全であり，ゆえに相互に依存しあう．互いが不完全なまま対話し，交渉しあいながら発展するコンヴィヴィアリティ（共生的実践）を特徴とし，それは平和を重視するという．

平野（野元）美佐による終章「紛争解決と社会的和解・共生のための『アフリカ潜在力』に向けて」では，本書の各論稿の構成をいま一度振り返り，それを創造力，交渉力，想像力といった 3 つの視座から再整理している．アフリカ潜在力がいかに多様性に満ちたものかが確認されるのだが，さらに本書には，アフリカ人研究者によるコラムがある．3 章の後に挿入されたマモ・ヘボ「日常生活に埋め込まれた紛争と対立のマネージメント法―エチオピア南部アルシ・オロモ地域における『遮断』と『回避』の効用」では，当該地でのハムメエンナが紹介されている．これは親しい者のあいだでルールを破るものがいて対立が生じたときに，コミュニケーションを断絶するという衝突「回避」の方法だという．6 章の後のウィルバート・サドンバ「経済制裁による包囲網とグローバル化のるつぼのなかで―ジンバブエのインフォーマルな金属産業にみられるアフリカ潜在力」では，国際的な経済制裁にもかかわらず，都市部においてインフォーマルセクターによる経済の活性化がみられるという．筆者はこれを慣習や

伝統知識なども組み合わせた文化的かつ政治経済的な運動だと読み取る．

さて，本書の多彩な事例は読者の関心を惹く一方で，拙評の作成には，評者にとって少なくともシリーズ全巻の読破と要約が必要であったと思われる．紛争解決や共生を焦点とした本書でも，潜在力の示す範囲がどこまで広がるのか，その射程の広大さに圧倒されるからだ．いい換えればその問いと概念の射程に不安を感じる読み手もいるかもしれない．故郷と移民とのネットワークから，婚資交渉，隣人についてのイメージや教育のありかたなど，「紛争がない状態」まで含めた事例研究は無限に広がってゆく．極論すれば，紛争解決や共生を目標としながらも，人類史や生態学へと射程を広げると，「争い」自体の価値判断を相対化してしまわないだろうかという不安も生じよう．また，不安な読み手は既存の概念や論稿の題名に用いられた語のほうが理解しやすいと感ずるものもいるだろう．たとえば「潜在力」は「社会関係資本」であったり，「絆」のことではないか，とか，「平等主義」や「在来知」のほうがしっくりすると感ずる場合である．ともあれ，本シリーズが拓く射程の重要さは疑いようもなく，評者はその学びを今後の課題としたい．

〈太田至総編集　アフリカ潜在力 2〉
遠藤　貢編.『武力紛争を越える―せめぎ合う制度と戦略のなかで』京都大学学術出版会，2016 年，360 p.

牧野久美子 *

本書は 2011～15 年度に実施された「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」，通称「アフリカ潜在力」研究プロジェクトの「政治・国際関係ユニット」による成果である．本書は国家レベルの紛争への対応，また紛争後の和解や共生の課題への取り組みについて，主に制度的な観点から検討している．

本書は大きく 3 部に分かれ，序章と終章を含めた 12 本の論文と，3 本のコラムから構成されている．以下では本書の内容を簡単に紹介したうえで，若干のコメントを試みる．

序章「紛争を抑止し和解を進める知恵を探る」（遠藤貢）は，西洋近代国家をあるべき国家の姿と措定し，アフリカ国家をそこからの逸脱ととらえる見方から脱却することを，本書の議論の出発点に据える．代わって目を向けられるのは，多様な主体が国家や秩序のあり方をめぐって不断に交渉を繰り広げ，その結果として新たな制度が形作られていくダイナミズムである．具体的には，フォーマルな国家のほかにインフォーマルな組織や制度も秩序の形成・維持に役割を果たすハイブリッド・ガバナンスや，西洋近代刑事司法の特徴である応報的正義／司法とは異なる修復

* 日本貿易振興機構アジア経済研究所